

県立愛川高等学校 平成28年度 第2回学校運営協議会及び評価部会記録

日時 平成28年12月16日(金) 10:00~12:00

場所 県立愛川高等学校 校長室

出席者 委員

石田裕昭 神奈川工科大学入試広報課 担当部長

佐野昌美 愛川町教育委員会 指導室長兼教育開発センター所長

加藤一男 愛川町三増区長

川匂秀彦 愛川高校同窓会長

大沢利朗 愛川高校校長

(欠席: 篠崎ひとみ 愛川高校PTA会長)

事務局

尾本一則 愛川高校副校長

中西正文 愛川高校教頭

安達晃雄 愛川高校総括教諭

次第

1 校長挨拶

- ・運営協議会および評価部会の同時開催について
- ・同窓会長の参加について

2 校内見学

- ・校長室→中庭→生徒昇降口→2年生家庭科実習→2年生教室授業→1年生教室授業→コモンスペース→1年生美術実習→2年生体育館実技→1年生情報教室→3年生教室授業→職員室前スペース→図書室→校長室

校長説明)

- ・トイレアートに関すること
- ・遅刻数減少への取り組みについて…朝の指導、携帯電話預かり指導
- ・体育の取り組みの変化について…きちんと取り組むようになった旨

3 評価部会

石田) 教室が落ち着いている。

個性化教室とは?…多展開のためや、在県外国籍の生徒のために使用される教室。

トレーニングルームについて…たいていの学校にあるが、維持に費用がかかる。

本校のものはかつて目玉であった。

佐野) H15~18に学校見学に来ているが、まるで劇的 Before After である。

素晴らしい学ぶ姿勢が見られる。

図書室が充実している。

先生方の頑張りが見受けられる。

加藤) 高校から愛川中へ生徒が訪れてスマートフォンの使い方を指導しているが、愛川中
学生がさらに田代小へ訪れてスマートフォンの使い方指導をしてくれた。これらの連
携はすごく良い。愛川東中や愛川中原中でも行えると良い。

川匂) 先日、愛川高校で講演を行い愛川高校の環境の良さを生徒に伝えた。生徒は他の高

校と比べられないのだが。中庭の存在は大きいものとする。環境、指導、授業がリンクして良くなっているのが分かる。

校長) コモンスペースはミニステージとしても活用できる。ゴミが落ちなくなったのは、生徒の心の有り様が変わってきているのかと考える。

今年度入学の1年生に対しては苦勞が予想されたが、特別指導の件数やそれに関わる人数も少なくなった。また、学校説明会も愛川3中対象の回の参加人数が少なかったが、例年に比べて、すでにそれまでに学校説明会に参加しているのではないかと、すなわち早めに愛川高校志望を決めている生徒が多くなったのではと推測される。

校長) 取り組みについては何か無いでしょうか？

佐野) 先ほどのスマートフォンの使い方指導のように外に出かけて生徒が活躍している分はどのように評価をしてあげているのか？・・・高峰小、愛川東中、愛川中原中でアンケートをお願いします。(例、件数、何人参加か分かるものを要望する)

石田) 朝学習とはどのようなものか？

校長) かつて i-Basic として小中に遡っての内容を行っていた。このときは学ぶ姿勢を主としていた。その後、基礎学力を重視しだし、昨年より i-Unit という形で遂行している。

朝学習をする。ードリルで繰り返す。ーテストで確認する。

スクリーニングで声かけをする。という形

朝ドリルの評価をきっちりすることにより、取り組みをきっちりさせている。

石田) 朝学習の活用は良い。面白い。

校長) ここまで、評価部会とします。

4 運営協議会

校長) ・部会についての説明

連携通信・・・中学校の先生に作ってもらった。

大学との連携・・・本校の連携行事では高校生が内容を咀嚼して中学生にアドバイスする体制を築きつつある。

- ・この後、地域連携部会を立ち上げて行く予定である。
- ・社会教育での目線での愛川高校の立ち位置を築いていく。
- ・本校には在県外国籍の入学枠はあるが、愛川町には入国して4～5年の生徒もいる。何とかならないかと考えている。
- ・留学生との違いは留学生は卒業後自国へ帰るが、在県の生徒は日本で暮らしていくことになる。
- ・外国につながるのがある生徒は、町では土曜寺子屋などがあり、そこに本校外国籍生徒が行けばサポートする。同じようなことが本校が個性化の部屋などの場所に関しては提供できるがいかかがか。

・岐阜県可児市では地域活動で、町でキャリア教育を行い、最終的に NPO をお願いしている。

・可児高校で、1年生が市のプロジェクトに参加させてもらっている。愛川町ではこども議会がある。愛川町のプロジェクトの議論の場に何回か生徒を参加させていただ

くことはできないだろうか。答えの無い問題に取り組みことは楽しいと考える。

・愛川ブランドに高校生の企画力を反映させたい。町民参加プロジェクトには年配の方の参加希望者が多いと聞く。教員は出来ないなので、町に軸足となる方を設けていただけないか。

・愛川高校では平成30年度から「プラス1選択」としてボランティアなど外部機関で35時間を行い、1単位として認め、3年生までで取ってくることを考えている。本校の生徒は和太鼓などすでに持っているコンテンツを示すことは出来るようになったが、ボランティアなどコミュニケーション力を必要とすることには自己肯定感の低さから参加しにくい状況であることを改善する。愛川高校の取り組みを神奈川のモデルプラントしていきたい。急がずに作っていきたいと考える。

佐野) 小学校でメンタルフレンドや丸付けボランティア、運動会のボランティアには希望があると考えるが、誰がコーディネートできるのか？

石田) 大学もサマースクールで35時間のものがあるが、愛川高校は大学生と高校生が一緒になってボランティアに取り組むなどのスタイルを望んでいるのだろう。企画を自分でいくと何かできるのではないだろうか？

川匂) 愛川町は地域の大きさ、人口の量、丁度よい。その地域を生徒がどの程度知っているか。愛川町も地域により風土が異なる。1年生で地域を知るという催しをすると良いのかもしれない。

校長) 連携で地域学が重要と考えたが、難しかった。生徒は愛川高校というと自然が豊か、伝統文化に力を入れていると答えるが、実態は知らないかもしれない。授業に組み込めるとよい。

川匂) 愛川町をウォーキングし足で歩いて発見するとよい。

加藤) 歴史って難しい。三増合戦、あれ何？と言われる。小田原のように城でもあると分かりやすいのだが。

佐野) 小中学校でも学区を学ぶのが先で、郷土の歴史となると深くない。

加藤) 三増地域でも歴史を伝えるのが難しい。獅子舞も形を変えて引き継ぐようにしないと若者には難しい。お囃子のリズムを変える提案をしてもダメだといわれた。

校長) 今回の提言を参考にし、次回を2～3月に開催し、「1年のまとめ」を考えている。

以上 閉会